



大昔の人々は、どうやって火を起こしていたの



木と木をこすり合わせ、まさつ熱で火を起こしていたんだよ。

木と木のまさつ熱で火を起こす方法が、考え出された

大昔の人々は、木と木をこすり合わせて、火を起こす方法を考え出しました。木と木がこすれ合って火が起きることを、山火事などのいろいろな体験や経験から、考えついた人がいたのでしょう。縄文時代じょうもんじだいから弥生時代やよいじだいにかけては、木の板の上で、「きり」のような棒ぼうをはげしく回し、そのまさつ熱で起こった火を、かんそうした草に移して燃え上がらせる方法が、考え出されました。

「手もみ法」から「まいきり法」に変わった

初めは、両手で棒をもんで回す「手もみ法」で、火を起こしていました。しかし、この方法は、力があるし、時間がかかります。そこで、棒を横木の穴あなに通し、横木の両はしと棒のはしをひもで結び、このひもが棒にまきついたり、もどったりする力を利用して回す「まいきり法」が、考え出されました。棒は「火切りぎねひきぎね」、板は「火切りうす」とか「火切り板いた」といい、杉などの木で作られたようです。

火の起こし方

手もみ法



まいきり法

